

日本書紀における助数詞について

三 保 忠 夫

目次

- 一、はじめに
- 二、原文における助数詞
- 三、古訓における助数詞
- 四、おわりに

一、はじめに

助数詞は、既に、上代において、比較的多くの用例を拾うことができる。これらは、日本語本来のものであろうか、あるいは、そうでなくば、いつ、どこから、どんな経路で、日本に入ってきたのであろうか、同時に、そうした時代において、助数詞(相当の文字)は、どのように受容され、攝取されたのであろうか。そこには、和読形式(翻訳)、字音読形式(原音読)、また、不読形式といった対処方法が考えられるが、具体的には、どのような情況であったのであろうか。本稿は、こうした問題を究明すべく、日本書紀、および、その古訓について検討してみたい。

日本書紀三十巻は、養老四年(七二〇)、舎人親王によって奏上された純粹漢文体による国史である。その編纂には、

日本書紀における助数詞について

渡唐者や帰化人系の史官も加わっていたとされる。本稿では、まず、その原文における助数詞を整理し、これを通して奈良時代初期の助数詞用法の一端を把握し、次いで、その古訓⁽²⁾を検討し、書紀古訓における助数詞の受容、摂取の様相を窺いたい。

依拠する写本、また、古訓資料は次である。

(一) 岩崎本 東洋文庫蔵

卷二十二・推古紀と卷二十四・皇極紀の二巻で、本文は、寛平・延喜の頃の書写にかかる。訓点(朱・墨)には左記がある。

④ 平安中期末点(第五群点)

⑤ 院政期点(第五群点)

⑥ 室町時代宝徳三年(一四五二)点、および、文明六年(一四七四)点、ともに一条兼良加點

*『^秘大観日本書紀』(大正十五年五月印行、大阪毎日新聞社)、また、築島裕・石塚晴通著『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀 本文と索引』(昭和五十三年十一月、日本古典文学会内、貴重本刊行会)による(④⑤の符号の用い方は後者にならう)。

(二) 前田本 尊経閣文庫蔵

卷十一・仁徳紀、卷十四・雄略紀、卷十七・継体紀、卷二十・敏達紀の四巻で、本文は、平安後期(十一世紀中期)の書写にかかる(道長の子、能信・頼宗・教通の筆と伝える)。訓点は院政期の加點になる(古紀伝点)。

*右『^秘大観日本書紀』、また、石塚晴通「前田本日本書紀院政期点」(本文篇、研究篇)、『北海道大学文学部紀要』、二五―二六(一九七七年三月)、二六一―二六二(一九七七年十二月)、二六一―二六二(一九七八年三月)による。

(三) 図書寮本 宮内庁書陵部蔵

次のような三種、十二巻を有する。

(イ) 卷十二・履中紀反正紀、卷十三・允恭紀安康紀、卷十四・雄略紀、卷十五・清寧紀顯宗紀仁賢紀、卷十六・武烈紀、卷十七・繼體紀、卷二十一・用明紀崇峻紀、卷二十二・推古紀、卷二十三・舒明紀、卷二十四・皇極紀、以上の十卷は、院政期永治二年（一一四二）頃の書写・加點（古紀伝点）になる。

(ロ) 卷十・応神紀は、院政期写、無点。

(ハ) 卷二・神代紀下は、南北朝時代興国七年（一三四六）写・加點。但し、卷頭八十四行は江戸時代補写。

* 『秘籍日本書紀』（昭和二年七月印行、大阪毎日新聞社）、また、石塚晴通著『図書寮日本書紀 本文篇』（昭和五十年三月、美季出版社）による。

(四) 鴨脚本 鴨脚光朝氏藏

卷二・神代紀下の一巻で、嘉禎二年（一二三六）十二月書写・移点。

* 古典保存会の複製本（昭和十六年七月）による。

(五) 北野本 北野神社藏

日本書紀三十卷の内、卷二と卷十四との二巻を欠く二十八巻を有する。これらは、書写年代から、次のように分類される。

第一種 卷二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、の六巻は、院政初期頃写、延文元年（一三五六）神祇伯資繼王の加點。後に、卜部兼永（天文五年（一五三六）七月横死）所持（資繼の奥書を抹消する）。

第二種 卷二十八、二十九、三十の三巻は、源平時代、あるいは、鎌倉時代の書写。

第三種 卷一、四、五、七、八、九、十、十二、十三、十五、十七、十八、十九、二十、二十一、の十五巻は、吉野時代写。

○右、第二種、第三種、ともに資繼加點、兼永伝得本である。

第四種 卷三、六、十一、の三卷で、兼永補写、加點。

第五種 卷十六の一巻、江戸時代補写。

*貴重図書複製会の複製本(昭和十六年)による。但し、本稿では、右の第一種(卷二十二〜卷二十七の六巻)を用い、他は、後日に委ねる。

なお、北野神社には、この他、「一峯本」と称される三巻(神代紀上・下、神武紀)が蔵されている。

右に、古訓資料を掲げた。用例を引く場合、それぞれは、「岩」「前」「凶」「北」のように略称し、その巻次、行数、あるいは、丁数を添えることとする。傍訓には、声点の付されたものもあるが、このための注記は省く。

二、原文における助数詞

助数詞とは、数を表わす語(基数詞)に添え、それがどのような事物(対象語)の数量であるかを示す接尾語の一種である。

外見上、(A)「基数詞+助数詞」と、(B)「基数詞+名詞」とはよく似ており、紛わしい。しかし、この前後に、その対象語(名詞、および、動詞)が位置すれば、これは、前者であり、そうでなければ、後者であると判別されよう。⁽³⁾

日本書紀の原文(歌謡を除いて)には、次のような助数詞がみえる。⁽⁴⁾その表記された文字を配列し(漢字の部首順)、通し番号を付し、それぞれの対象(対象語)、および、その古訓(後述)等を、一覧表にしてみよう。

ここでは、「単位」と深く関わる「圍」「掬」「握」「束」「段」「隊」なども参考としたい。参照項目は、↓印で示すこととする。

「古訓」の欄に、「ヒトツ」と記入したものは、右の(A)「基数詞+助数詞」の部分に、ヒトツ、フタツ……、との付訓のみえることを意味する。また、「一」印は、先の古訓資料に付訓例の得られないことを示す。⁽⁵⁾

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
座	度↓廻遍	↓載歳捻 年・季	夜	圍	口 ↓人軀	卷	區	匹足↓頭	具	倍 ↓重	介	人 ↓口軀	助数詞
祓物を置く台、高皇産靈尊の産児、など	(度数)	(年数)	(夜数)	大樹、蠅群などの大きさをいう	〔奴、唐俘、韓奴、狛虜、掖玖人、新羅人〕 〔大刀、小刀、劔、鋏、斧、鍾、鉢、槽〕	經論、令、新字(などの典籍)	邸宅の敷地	馬、驢、駱駝、馱、飾騎	〔仏像、幡、(朝服、御衣、袴、袍袴等)〕 〔弓矢〕	(重複の回数)	使者	〔臣、民、工人、また、僧尼、虜、など〕 〔僧尼、火闌降命、彦火火出見尊〕	対 象
―	ヨリ	トセ	―	〔イダキ・ウダキ〕 ダキ	〔タベ〕 〔タリ・リ〕 〔ヒトツ〕	―	トコロ	〔ヒトツ〕	ソナヘ ヨ□モ	へ	〔ヒトツ〕	タリ ハシラ	古 訓

日本書紀における助数詞について

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
狗 ↓ 頭	片	段	歳 ↓ 載年総	條	根 ↓ 本莖	枝	枚 ↓ 張	束	本 ↓ 根莖	日	握 ↓ 掬	掬 ↓ 握	所 ↓ 處	戸	張 ↓ 枚	廻 ↓ 度遍	廷 鋌 ↓ 枚
犬	火	切れ目	(経過した年数など)	憲法の条数、小幡、(禁式、麻など)	蘭	出石梓	蜜蜂房、熊皮、瓮、(盾、鞆、皮、鋏)	稻、麻	嘉禾	(日数)	鋏、稻(などの長さ)	鬚、脛(などの長さ)	寺、村、原、屯倉(などの所在)	封戸	弓、韋、鹿皮	(回数)	鐵
丨	丨	丨	トセ	ヲチ、スヂ	モト	丨	〔ヒトツ〕、ヒラ	ツカ	丨	ヒ、カ	ツカ	丨	ト、トコロ	丨	丨	タビ	〔ヒトツ〕

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
軀↓人口	畏	處 ↓所	莖↓本根	色 ↓種	艘 ↓隻	群	縵 ↓竿	縫	紐	籠	箱	筒 ↓匹	竿 ↓縵	種 ↓色	↓年載歲 稔	甕
仏像	綿	身体の部所、田・屯倉(などの所在)	蘭、瑞稻	雷公、綵・絹や綾羅、姓などの種類	船	悪者	香菓	白楯	柶繩の結び	鹽、鈔	白玉	匏、天目、驢、(盤石、御統、男、玉)	矛、幡、香菓	明器、明衣、宝物、調物、種族等の種類	(年数)	酒
ハシラ	カマス	—	モト	クサ	「ヒトツ」、フナ	—	—	—	—	—	—	「ヒトツ」	—	クサ、ヤカラ	トセ	—

日本書紀における助数詞について

る。一見するところ、正倉院文書、その他と大きく異なるものではなさそうであるが、延喜式など、平安時代の用法と比べると、多少、異なるところもある。

たとえば、日本書紀では、「人」は、一般の臣、民、工人、また、僧尼、および、虜、俘虜などを数える。一方、(イ)韓奴、奴、高麗奴、王人奴、狛虜、奴婢、唐人、唐俘、(ロ)掖玖人、(ハ)新羅人など、を数えるには「口」が用いられる。(イ)は、「猷」「貢」の対象として、また、(ロ)は帰化した人々、(ハ)は漂着、流着した人々として、それぞれ、みえているものである。「口」は、「人」と異なり、その人格を顧慮しないような場合に用いられるようである。

延喜式では、「人」は、一般の人物、まれに、僧侶、「口」は、僧侶を数えるという明確な用法差がある。

また、日本書紀の助数詞を中国古代の用法と比べると、漢代のそれと通じ、その後とは合わないところがある。

たとえば、日本書紀では、馬、飴騎、驢、駱駝、馱を「匹・疋」で数え、白鹿、羊、水牛、犬、騾を「頭」で数える。⁽⁶⁾漢代の敦煌漢簡では、馬、驢、橐佗、駝を「匹」で数える。⁽⁷⁾居延新簡では、馬と橐佗を「匹」で、牛や魚を「頭」で数え、馬圈湾出土漢簡では、馬、驢、口駝を「匹」で、牛、羊、鷹を「頭」で数える(後者には、また、(橐)佗を「頭」で数えた例もある)。

しかし、トルファン文書⁽⁸⁾(東晋高昌郡時代〜唐代西州時代)では、馬を「匹・疋」、驢、駝、牛を「頭」、羊を「口」で数える。大慈恩寺三藏法師伝⁽⁹⁾でも、馬を「疋」、牛、象、騾を「頭」で数える。馬の「匹・疋」に対し、驢、駝、駱駝、牛に「頭」、羊に「口」を用いるのは、他の唐代文書⁽¹⁰⁾でも同様である。

なお、日本書紀の原文には、また、仮名書きの歌謡の中に、次の類がみえている。⁽¹¹⁾

[き]

○ ……宇摩能耶都擬播 鳴思稽矩謀那斯……(十四、雄略十三年三月、歌謡79)

万葉仮名で「耶都擬」とあり、「八匹」の意で、馬を数えたとされる。「ひき(匹)」の転かというが、如何であろうか。

日本書紀における助数詞について

古い語のようである。この条、前田本には、「宇麼能。耶都擬播。」(14、321)との付訓がある。

〔たり・り〕

○ 又歌之曰、愛瀨詩鳥 毗儂利……(三、神武紀、歌謡11)

○ ……和芸毛古等 赴駄利古喩例麼……(十一、仁徳四十年二月、歌謡61)

〔シ〕

○ 比苔菟麻菟阿波例 比等菟麻菟 比苔瑠阿利勢麼……(七、景行四十年十月、歌謡27)

○ 耶麻鵝播爾 烏志賦挖都威底……(二十五、孝徳、大化五年三月、歌謡113)

〔ス〕

○ 於彌能姑能 耶賦能之魔柯枳……(十六、武烈、即位前紀、歌謡91)

〔ハ〕

○ 虚呂望虚曾 赴多幣茂豫著……(十一、仁徳二十二年正月、歌謡47)

○ 那菟務始能 譬務始能虚呂望 赴多幣著氏……(同右、歌謡48)

○ 飲瀨能古籛 多倍能波伽摩鳴 那々陛鳴絶……(十四、雄略、即位前紀、歌謡74)

この他、「耶陸耶智羅智枳」(歌謡86)、「耶陸能矩瀨智枳」(同90)、「野陸能比母騰俱 比騰陸多爾」(同117)などの例がある。

〔もと〕

○ 介瀨羅毗苔茂苔……(三、神武紀、歌謡13)

三、古訓における助数詞

日本書紀の助数詞に関する古訓には、大別して二様がある。一は、原文の「基数詞＋助数詞」の二字をヒトツ、フタツ……との和語一訓で読むものである（二字一訓）。他の一は、その下字（助数詞）の字義を汲んで、具体的な和語（助数詞）を添えるものである。いずれも和読である。便宜上、前者をA方式、後者をB方式と称し、以下に用例を示そう。

「一」 A方式

先の表に、「ヒトツ」と記入した助数詞に、この方式がみられる。以下に用例を示そう。

2「介」

- 非^{ヒトツ}一^{カヒノキミ}ノ^{ヒト}介^ノ使^ノ使^ル・遣^ニ重臣等^ニ而^テ教^ス覚^ル（舒明、即位前紀、北23、4ウ）

「二介」を「ヒトツ」、「使」を「ツカヒノキミ」と読む。二漢字を一訓で読んだり、一漢字を和語一訓で読んだりすることは、漢文の意識的訓法の一つであり、平安初期の漢籍、および、仏書の訓読語にもみえている。⁽¹²⁾

5「匹・疋」

- 駱^{ラク}一^{クダ}駝^ト（岩22、45）
①ラク②クダ③ト

- 餉^{カサリ}一^{ムマ}騎^ナ七^ナ十五^ナ疋^ナ一^ナ而^ナ（岩22、25）
④カサリ⑤ムマ⑥ナ⑦ナ⑧ナ⑨ナ⑩ナ⑪ナ⑫ナ⑬ナ⑭ナ⑮ナ⑯ナ⑰ナ⑱ナ⑲ナ⑳ナ㉑ナ㉒ナ㉓ナ㉔ナ㉕ナ㉖ナ㉗ナ㉘ナ㉙ナ㉚ナ㉛ナ㉜ナ㉝ナ㉞ナ㉟ナ㊱ナ㊲ナ㊳ナ㊴ナ㊵ナ㊶ナ㊷ナ㊸ナ㊹ナ㊺ナ㊻ナ㊼ナ㊽ナ㊾ナ㊿

- 良^イ馬^イ一^イ匹^イ（岩24、43）
㉑イ㉒イ㉓イ㉔イ㉕イ㉖イ㉗イ㉘イ㉙イ㉚イ㉛イ㉜イ㉝イ㉞イ㉟イ㊱イ㊲イ㊳イ㊴イ㊵イ㊶イ㊷イ㊸イ㊹イ㊺イ㊻イ㊼イ㊽イ㊾イ㊿

前田本にも、「馬八疋」(14、32)、図書寮本にも、「以馬一疋^{ヒトツ}」(13、85)、「馬八十疋」(14、32)、「賜良馬疋」(24、32)、北野本にも、「餉騎七十五匹^{カサリウマナハツチマライツ}一^ナ而^ナ」(22、17オ)、「賜良馬一疋^{ヨキヒトツ}」(24、4オ)とみえる。訓合符を付した例もあり、

やはり、二字一訓で「一匹^{ヒトツ}」のように読んだものらしい。この場合、他においても同様であるが、付訓は、下字よりも上字(数字)の傍に、偏つて位置しがちである。

8 [口]

二用法の内、人物を数える場合には、タベタリ・リの付訓があるが、器物(劔、大刀、七枝刀、金飾刀、神刀、刀、出石小刀、小刀、刀子、斧、鋏、鋸、鎌、銅鑊鍾、鍾、鉢、槽など)を数える場合に、このA方式がみえている。

○ 大刀八^{ヤツ}口^マを^マて (前14、320)

○ 大刀八^{ヤツ}口^マを^マて (図14、382)

○ 送^{スキ}鋏一口^ツを^ツ・而^ツを (北25、26オ)

14 [廷・鋌]

○ 鐵^{④ネリカネ}廿^{④ハタチ}廷^④を^④。 (岩24、43)

○ 錢(鐵)廿^{ハク団鋌(ママ)}餘^(ミセケチ)。 (図24、32)

○ 錢廿^{セハハツチ}鋌^{セハハツチ} (北24、4オ)

「原文は、「仍賜^ニ 良馬一匹・鐵廿鋌。」(二十四、皇極元年四月)とありたい。鐵一鋌は、三斤五両。別に、「并鐵鋌卅枚」(九、神功、撰政四十六年三月)ともみえる。

24 [枚]

「枚」は、天平瓮、八十平瓮、天手袂、葉盤、赤盾、黒盾、杖、柄、角弓箭、鐵鋌、刀子、鋏、熊皮、韋、牛皮、鹿皮、蜜蜂房などを対象として用いられる助数詞である。

○ 以^②蜜^③房^④四^⑤枚^⑥を^⑦て (岩24、202)

④訓、⑤訓にA方式が、⑥訓にB方式「枚」訓がみられる。北野本には、「以^②蜜^③蜂^④房^⑤四^⑥枚^⑦を^⑧」(24、15ウ)とある。時間の経過からすれば、A方式はB方式に先行するものである。

36 「箇」

○ 全^①匏^②兩^③一^④箇^⑤を^⑥ (前11、131)

○ 取^①兩^②一^③箇^④匏^⑤を^⑥ (前11、131)

○ 自^①百^②濟^③一^④還^⑤て^⑥猷^⑦駱^⑧・入^⑨一^⑩駝^⑪上^⑫一^⑬箇^⑭・驢^⑮二^⑯箇^⑰・ (北26、5オ)

○ 喚^①至^②兩^③箇^④蝦^⑤夷^⑥を^⑦ (北26、14オ)

匏、驢、蝦夷などを対象として「箇」が用いられ、これにA方式の付訓がみられる。

43 「艘」

日本書紀では、「船」(および、「艇」「舟」「舶」など)は名詞、「艘」は、それを数える助数詞としてみえている。この助数詞にも、A方式、B方式の両様が見える。

○ 大^①一^②舶^③與^④三^⑤同^⑥一^⑦船^⑧、三^⑨艘^⑩上^⑪ (岩24、71)

④訓、⑤訓のA方式「(ミ)ツ」は、⑥訓のB方式「ミフナ」に先行する。この条、図書寮本、北野本にも、同じく「三艘」とある。

なお、「一艘」訓は、岩崎本の⑥訓、また、前田本、図書寮本、北野本にもよくみえる。

56 「隻」

日本書紀における助数詞について

矢、鳥、船などを数える助数詞である。

○ 鵠カサ、キツツを。一隻①。(岩22、40)

○ 孔②雀③。一隻④。(岩22、41)

○ 白雉⑤一隻⑥。(岩22、45)

○ 鴻カリロツト十隻與を。(前14、293)

図書寮本には、「鴻カリロツト十隻與去」とある。

○ 来来献来孔来。平来雀来。(平)一隻来・鸚来。(去)鸚来。平来一隻来。(北25、32ウ)

○ 百濟のツツ船ツツ二隻を。(北25、42オ)

○ 献去鸚去。平去一隻を。(北26、4オ)

○ 賜百濟のツツ佐平鬼室福信トヨに矢ロツ十ト万ロツ一隻を。(北27、3オ)

57 [面]

○ 賜沙尼ツツ・具ツツ・那ツツ等に……鼓ツツ二面を。(北26、7オ)

58 [領]

毳毼、人衾、綿袍、施袈裟、甲、人甲、鎧を数える助数詞であり、A方式の付訓がある。

○ 着⑦二⑧綿⑨袍⑩三⑪領⑫。(岩24、123)

○ 着⑬二⑭綿⑮袍⑯三⑰領⑱。(岩24、123)

○ 図書寮本にも北野本にも「三領ミツを」とある。

○ 賜沙尼・具^(上)・那^(上)等^に……^{カフト}鎧^{アツタ}二領^ニ (北26、7オ)

白鹿、羊、水牛、犬、騾、鮪旗などを数える助数詞である。同じく動物を対象とする「匹、疋」「箇」「隻」等と同様、A方式となっている点に注意される。

○ 白鹿^{①シロキ}一頭^{②カセキ} (岩22、42)

○ 賜沙尼・具^(上)・那^(上)等^に鮪旗^{クハタ}廿頭^{ハタロウチ} (北26、7オ)

右の「□」部は、文字を消したものらしい。

61 [騎]
○ 與^{モ、アマリ}數^ノ一^ノ百^ノ騎^ノ馬^ノ軍^ノ (図14、293)

右もA方式とみられるが、前田本には、「與^{モ、アマリ}數^ノ一^ノ百^ノ騎^ノ馬^ノ軍^ノ」(14、248)とあり、「騎」は名詞として訓読されている。

〔二〕 B方式

この方式の古訓には、次のような例がある。以下に用例を示そう。

1 [人]

僧尼、また、火闌降命・彦火火出見尊の兄弟を対象として、ハシラという付訓がみえる。

○ 僧^{①ヤホアマリ}八^{②アマリ}一^{③ムタリ}百^{④ムタリ}十六^{⑤ムタリ}一人^{⑥ムタリ} (岩22、459)

○ 僧^{ホウシヤホアマリ}八^{トアマリ}一^{ムハシラ}十^{ムハシラ}六^{アマイ}人^{アマリ}・尼^{アマイ}五^{アマリ}百^ノ六^ノ十^ノ九^ノ人^ノ・并^テ一^{ミホアマリ}千^キ三^{サン}百^{ヒヤク}八^{ヤツ}十五^{イソ}人^{ヒシラ} (北22、35ウ)

日本書紀における助数詞について

○ 兄弟フタノト、二人ハシラ (図2、421)

ハシラとの和語は、原文に「人」字がない場合でも読み添えられる。古訓における用例としては、むしろ、こちらの方が多し。対象は、神みこと、男おとこ、子みこ、天皇、天皇の子、僧尼、仏像などに限られる。なお、仏像を数える助数詞「軀」にも同訓がみえる。

次に、一般の臣民、軍衆、工人、また、僧尼、虜、俘虜などを対象として、タリ・リという付訓がみえる。用例は多い。

○ 軍衆イクサ 二万アマリ 五千イツチタリ の人ひと。 (岩22、70)

○ 紀の臣シノ・塩手シホ三人ミタリ進シノて曰イハレ (北23、2ウ)

ときに、原文の助数詞「人」を、「衆数イクササマケアルサ 千人ミヤ人ひとて」(前17、232)のように即読しない例、「一人ヒトリ人ひと」(図2、537)のように名詞と解する例もある。

³ [倍]

○ 取ト 他ヒト 貨賂マヒ 二フタ 倍ハタラム 徴ヒ之シ (北25、6オ)

⁴ [具]

○ 仏の像ヒトツナヘ 一具ヒトツナヘ (岩22、391)

○ 且ナカ 大灌オホソクワン 一具ヒトツナヘ 頂オヤウ 一具ヒトツナヘ (北22、30ウ)

右の条、岩崎本に「一具ヒトツナヘ」(22、392)とある。

○ 弓矢ユミヤ 二具フタツツナヘ (北26、7オ)

「具」の付訓は、ヨソヒでもヨロヒでもないようにみえる。あるいは、誤写か。未勘。

6 [區]

○ 葛城宅七區カツラキイナトコロにて (前14、29)

宅地を数える。図書寮本にも同訓がある。

8 [口]

助数詞としての二用法の内、人を数える場合には、タベ、タリ・リの二様がみえる。

○ 掖①ヤ一②クシ玖③ヒト人三④ヒト一口⑤ヒト (岩22、342)

○ 掖一玖人廿口⑥ハタケリ (岩22、343)

推古天皇二十四年三月から七月に、屋久島から先後して三十人が渡来し、朴井ウラノに安置ハヤさせた、未還の内ウラノに皆死んだ、とある。岩崎本卷二十二には、A訓(延一例)、C訓(延三例)、ともに「タへ」とみえる。これが田部(大化前代、天皇領の屯倉で耕作に従事した部民)を意味するとすれば、助数詞としては扱いにくい。即字的に意識されたものであろうか。第一例につき、図書寮本や北野本は「三口」と付訓する。他も同じであらうか。

○ 以韓ウラヤツコの奴室ヌムコ……針六口ハシロクにて (図14、328)

前田本も同様で、「六口ムユクをムユクにて」(14、274)とある。「六人也」とは意味注で、これは、「口」に付訓はない(不読)とみるべきか、他から推してタリと読むべきか、定かでない。

9 [圍]

- 其^①太^②十^③圍^④。①イタクキ ②イタクキ ③イタクキ ④イタクキ (岩22、27)

- 其^①太^②十^③圍^④。①イタクキ ②イタクキ ③イタクキ ④イタクキ (前11、332)

沈水(香水)や流木、また、蠅の大集団の大きさに「圍」が用いられ、岩崎本^①訓にイダキ、^②訓にイダキ・ダキ、前田本にウダキ、^③圖書寮本と北野本にイダキ・ダキの訓がみられる。

「圍」につき、厩牧令に「周三尺為圍」とあり、また、坂元正典氏^⑬の考察もあるが、単位としてばかりでなく、助数詞としての用法もあつたのではなからうか。

11「年」

- 一^①百^②年^③ぬ^④矣^⑤。①モ、トセニ ②ナリ ③ヌ ④ヌ ⑤ヌ (岩22、448)

この条、北野本には「一^①百^②季^③矣^④」とある。

- 於^①茲^②三^③年^④。①ミトセニナリヌ ②ニ ③ニ ④ニ (前11、93)

12「度」

- 三^①度^②驚^③駭^④。①ミ ②ヨリ ③トヨム ④トヨム (函21、80)

- 兩^①度^②再^③拜^④て。①フタ ②ヨリ ③ヨリ ④テカム (22、219)

圖書寮本、北野本には「兩^①度^②」とある。

15「廻」

- 喚^①幾^②廻^③乎^④。①メシ、イタクヒ ②イタクヒ ③イタクヒ ④ヤ (前14、65)

図書寮本も同じく「幾廻」(14, 73)とある。

○ 呼ヨハヘトモ開ミカトと門ナ、ダヒを、七廻、不応コタヘ。(図21, 31)

○ 怯弱恐怖ミで三タヒ廻劫還。(図21, 107)

18「所」

○ 於カ輕カの村、磐余イハレの村二所フタトに (図14, 352)

前田本にも同じく「二所」(14, 295)とみえる。

○ 寺卅ムトコロ六ムトコロ所、 (岩22, 459)

北野本には「寺卅六所」(22, 35ウ)とある。

第一例が「所」であれば、これは、「限処」キリトコロ「寢所」ネトコロ「臥所」ヨシトコロなどのそれであろうか。

20「握」

○ 出雲者は新墾ニヒカリ々々。之十握稻トツカシネを (図15, 122)

長さの単位(四本の指で握った幅)といい、「十握劔」「九握劔」「八握劔」「八握莫莫然」「十握稻」のような連語の形でみえている。

21「日」

○ 行ユキニ一日ヒトヒにて (前14, 188)

○ 相モル持カこと二日一夜 (図14, 459)

24「枚」

A方式、B方式の両様あること先に述べた。

日本書紀における助数詞について

○ 熊シクマ皮七十枚ナイツヒラ (北26、9ウ)

²⁶[根]

○ 一根ヒモトの蘭ヲ (図13、49)

根部の有無に関わらず、モトで数える。

²⁷[條]

○ 憲イツクシキ法ノリ十七條トシチアママリナ、ヲチ (岩22、104)

図書寮本、北野本は、右の(A)訓に同じ。

○ 小チヒサキ幡ハツ十二條アマリ、ヲチ (岩22、392)

図書寮本、北野本には「條スチ」とある。

²⁸[歳]

○ 經コトコ三ミ百ヒャク歳トセ (岩22、447)

北野本にも同様の付訓がある。

○ 未ヒ滿ナラセ、トセニ百歳ヒャクトセ (北22、34ウ)

³³[稔]

○ 三ミ稔アハム之ノ間マヒ (前11、101)

34 [種]

- 明^①器^②明^③衣^④之^⑤類^⑥、方^⑦り五^⑧千^⑨種^⑩也^⑪ (岩22、296)

北野本にも「種」(22、23ウ)とみえる。

- 二種^①の宝^②物^③一^④て (図2、607)

- 領^①率^②百八十種^③勝^④一^⑤て (前14、372)

図書寮本も同様だが、「勝」については未詳。

- 安^①置^②三^③種^④白^⑤髮^⑥部^⑦一^⑧て (前17、43)

種族に関わつてはヤカラとみえる。

43 [艘]

A方式に関して先にも触れた。

- 以^①二^②飭^③一^④船^⑤卅^⑥艘^⑦一^⑧て (岩22、205)

- 貢^①献^②……并^③八^④十^⑤艘^⑥一^⑦て (前11、170)

- 調^①船^②八^③十^④艘^⑤ (図13、201)

44 [色]

- 五^①一^②色^③の綾^④羅^⑤一^⑥て (岩22、231)

日本書紀における助数詞について

北野本には「五色イツイロ」(22、18才)とみえる。

45 [莖]

○ 厭イ「乞テ戸ト」母「其アラ蘭キヒトモト」一莖モト焉ア (図13、48)

別に、「瑞蓮アサシキ……一莖モトと二の花ア」(図23、107)ともみえるが、これは名詞として扱う。

47 [褰]

○ 綿フタカマヌ二褰・、 (北25、37ウ)

48 [軀]

仏像を「軀はしら」で数えること、先にも触れた。

○ 銅◎カ、ネ◎アヒノ 繡◎の丈◎六◎の仏◎の像◎、各◎一軀◎を。◎(岩22、162)

図書寮本、北野本には「一軀ハシラ」とある。

○ 有モテリ彌勒の石の仏像ミカ一軀ハシラ。(前20、161)

49 [載]

○ 千載◎トゼニシモにて以難◎待◎こと一の聖◎ヒシリフ。◎(岩22、148)

○ 已ナヌに經トセ三載トセに。(図2、507)

53 [重]

甲、雲、席等は「重ヘ」、塔は「重コシ」と読む。

○ 二「重」甲。^{フタヘノ}「ヨロ」を (前14、384)

○ 図書寮本にも同訓がみえる。

○ 雖隔^ト八^ヤ重^ヘ之^ノ隈^{ヅマ}を、 (図2、551)

○ 「天八重雲」(図2、91)、「八重席薦」(図2、44)などの熟語の中にもみえている。

○ 建九重^{ツク}の塔^{ツタ}を (図23、145)

55 [隊]

○ 於海^{アマヘタノウミ}濱上^ノて射^シ死踊^シ伏者^{フク、ムラ}二^ニ隊^ヲ (前14、437)

○ 図書寮本にも「二^{フク、ムラ}隊^ヲ」(14、526)とある。

60 [首]

○ 謡^{ウタ}歌^{ウタ}二^ニ首^ニ (岩24、256)

○ 図書寮本、北野本にも「三^ミ首^ニ」とみえる。

○ 此の贈^{ウタ}答^{ウタ}二^ニ首^ニを (図2、641)

以上が、日本書紀古訓における助数詞である。この他、原文に助数詞としての文字がなくても、読み添え語として助数詞を添えることがある。次の類である。

「キダ」

○ 三^{ミキダニウチキル}に^ニ截^キ其^ノ弓^ヲを。 (図21、142)

〔クサ〕

- (及鼓吹弩抛石之類) ^{⑧トクサ}十^⑨物 ^⑩(岩22、351)

- ^{⑪ムクサ}六^⑫の^{⑬ケモノ}畜^⑭を ^{⑮ムハサ}(岩24、267)

- (阿倍大臣請) ^{⑯ヨクサオヨ}四衆 ^⑰於四天王寺・(北25、33才)

〔タビ〕

- 雷^{⑱イツタビ}五^⑲鳴^{⑳ヒル}於^㉑晝^㉒、^㉓(岩24、92)

- 以^{㉔ヒロムテ}三呼^㉕、(前11、66)

- 三^{㉖ミツレ}下^㉗、睡^{㉘ハツキ}て ^{㉙ツバキ}(図2、673)

- 又^{㉚カサネ}重^㉛て七^㉜喚^㉝ ^㉞(図13、107)

- 至于^{㉟ミタヒ}三^㊱乃^㊲從^㊳之、^㊴(北22、1ウ)

用例は多いが、一端にとどめる。

〔タリ・リ〕

- 四^㊵りの^㊶大夫^{㊷マチキミ}、^㊸(岩22、270)

- 有^㊹一^㊺の^㊻僧^{㊼ホツシ}二^㊽て ^㊾(岩22、440)

- 唯^㊿一^㊽二^㊾人^㊿ ^㊽(前11、321)

○ 五の子の中に (前14、40)

○ 三の妃を (図14、58)

○ 一一人當一 千謂三成歟 (北24、12ウ)

[ツ]

○ 有一の魚にて (図2、51)

[ハシラ]

神、男、子、皇族、仏像、僧尼に対しては、この語が添えられる(既述)。用例は多い。

○ 是の二の神を、(岩22、55)

○ 除ては是の二の神を・(北22、5ウ)

○ 凡て三子矣。(図2、113)

○ 始て造二丈六の繡像・俠侍八部等冊六の像を (北25、42オ)

○ (以沙門一千一為作(平)一聴・(平)衆と (北25、43ウ)

四、おわりに

本稿に漏れた助数詞、また、A方式、B方式、いずれの古訓もみられない助数詞の訓法については後稿において検討したい。北野本の他種訓点や後のト部家系諸本、近世刊本、その他にも看過できない用例がみえており、今後に補うべき点は少なくない。

さて、日本書紀には、多くの助数詞が用いられている。中国の文言文⁽¹⁴⁾、たとえば、その史書などに比較すれば、格段に多いようである。この点は、その依拠した資料(の性格)に負うところも大きいであろう。その編纂の地が中国でなく日本である点も関係しているよう。

古訓によれば、こうした助数詞は、少なくとも、A方式、B方式の二様で訓読されている。いずれも和読である。語学能力上は字音読も可能であったかもしれないが、訓読の方針、あるいは、姿勢として、あえて和読が行われているようである。とはいっても、それが和読できる場合はよい。和語の中に、既に、助数詞として存在する語⁽¹⁵⁾、あるいは、名詞なり動詞(運用形)なりを転用して使用できる語でもあれば、これを訳語としてよかろう。

しかし、一方、これといった和訳ができないこともあり、こうした場合に、ヒトツ、フタツ……のA方式が採用、または、援用されたのではあるまいか。古代において、「つ」は、数少ない和語系助数詞の中にあつて最も中心的な助数詞であつたとみられ、本稿でも、A方式は十二種の漢語系助数詞において行われている(古訓の枠外にも、用例は捨てるであろう)。「つ」は、従つて、対応範囲の広い、包容力の大きな助数詞であつたということにもなる。

もつとも、それゆえに、この方式には欠点もあろう。即ち、この方式は、原文の意図するところを過不足なく、十分に汲みとることができるのであろうか。

原文における「介」「匹・疋」「口」「錠」「枚」「箇」「艘」「隻」「面」「領」「頭」「騎」などは、それぞれ、その対象毎に、数え方を工夫したものであり、形体の類別表現に関わるところが大きい。これに対し、「つ」は、数量を数えることができるが、そうした類別機能をどれだけ備えているかという段になると、はなはだ心もとない。むしろ、この機能が薄弱であるからこそ、A方式が可能であるということになるかもしれない。A方式は、B方式と質的に大きく異なるのであり、かつ、原文の助数詞それぞれの機能を活かしつつ、和訳したものではないと知られる。

A方式がB方式に先行すること、後者が前者にとって替る傾向にあること、先にみてきたとおりである。日本書紀古

訓におけるA方式の存在は、日本語における助数詞とは何か、改めて考える契機となりそうである。

最後に、本稿の課題とするところを記して筆を擱きたい。

(1)原文——(イ)日本書紀の助数詞については、また、その編纂時に用いられた資料(古記、古文献、漢籍類など)やその性格等、編纂者の出自や立場などの面からの検討が必要であろう。

(ロ)加えて、先学の説かれる書紀区分論、同成立論、同文体論などを視野に入れ、⁽¹⁶⁾こうした方面からの分析も必要である。

(2)訓読法——(イ)古訓だけでは、どうしても用例数が不足するので、北野本の他種点、卜部家系写本(兼方本、兼夏本、兼右本等)、その他、また、近世刊本(寛文九年刊本等)などを援用し、その助数詞の訓法についての史的推移について検討しなければならない。

(ロ)一口に「古訓」といっても、訓読法の系統上、岩崎本古訓(㊤・㊦訓)と、大江家本とみられる前田本や図書寮本の二本との間には少異があり、また、本稿に扱った古訓類と卜部兼方本、および、兼夏本、その他の卜部家系諸本との間にも差異がありそうである。それぞれにおいて、助数詞がどのように対処され、訓読されているか、調査する必要がある。

(3)関連資料——日本紀私記、釈日本紀を検討し、彼此の比較を試みる必要がある。

(4)関連事項——度量衡の単位、および、その読み方を、併せ検討しなければならない。

(一九九四年、秋彼岸中日、攔筆)

注

(1) 日本古典文学大系(岩波書店)『日本書紀上』、「解説」、二三頁。

(2) 日本書紀の古訓については、神田喜一郎、小島憲之、阪倉篤義、上野務、大野晋、西宮一民、中村宗彦、築島裕、小林芳規、

林勉、白藤礼幸、石塚晴通、その他の先学に論考があり、就中、その助教詞については、阪倉篤義著『語構成の研究』（昭和四一年三月、角川書店）、築島裕著『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（一九六五年三月第二刷、東京大学出版会、一四〇頁）などに論及がある。

(3) 但し、対象語は、情況によつて省略されることがあるので、注意を要する。

(4) 原文において、その文字が助教詞であっても、古訓がこれを助教詞として読まない場合があるし、また、この逆もある。双方に一致がなくても、これら助教詞はできるだけ収集したい。但し、次の類は検討を保留する。

世代 列 房 級 等 箕 階 棗

(5) 北野本の他種点やト部家系写本、その他に付訓例の得られるものがあるが〔「ヒトツ」方式も含めて〕、これらについては別に扱うこととする。

(6) 駱駝、驢に「箇」を用いた例もある。なお、延喜式では、馬を「疋」、鹿、豕、猪、牛、兔などを「頭」で数える。

(7) 拙稿「敦煌簡牘資料における量詞の考察」、『島大國文』、第一九号、平成二年一月。

(8) 拙稿「吐魯番出土文書」における量詞について、『島大國文』、第二〇号、平成三年一月。

(9) もと、貞観年間（六二七—六五〇）の末年に、玄奘の高弟慧立によつて五巻に仕立てられていたが、周の垂拱四年（六八八）、その弟子彦惊が増加して十巻とし完成させた。

(10) 池田温著『中国古代籍帳研究—概観・録文—』、一九七九年三月、東京大学東洋文化研究所。

(11) 「阿麻多絆泥受邇 多儂比等用能末」（歌謡66）の「一夜」は名詞として扱う。

(12) 小林芳規『日本書紀古訓と漢籍の古訓読—漢文訓読史よりの一考察—』、『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』、一九六九年六月、表現社、四五・四六頁。

(13) 「圍」の変遷について、『日本文化史研究』、第七号、一九八四年。

「延喜式に見える圍について（上）」（同）（下）」、『帝塚山短期大学紀要』（人文・社会科学編）、第一八号、第二〇号、一九八一年一月、一九八三年三月。

(14) 助教詞（量詞）は、口頭語にはよく用いられるが、文言文では、省かれて容易に文字化されないようである。左記参照。

渡辺実「日華両語の数詞の機能—助教詞と単位名—」、『国語国文』、第二一卷第一号、一九五二年一月。

拙稿「居延簡牘資料における量詞の考察」、『島根大学教育学部紀要』、第二四卷第二号、一九九〇年二月。

拙稿「奈良時代の寺院縁起資財帳における助教詞の考察—古代中国における助教詞に触れて—」、『継承と展開1 古代語の構造

と展開」、一九九二年六月。

(15) こうした和語は、既掲のように、仮名書きや読み添え語としても所見する。

(16) 山田英雄「日本書紀の文体論について」、『史学雑誌』、第六三編第六号、一九五四年。

〔附記一〕

佐々木峻先生には、四分の一世紀余にわたり、有形無形の御指導をいただいた。深く御礼申し上げるとともに、心より御冥福を祈り申し上げる次第である。

*追記 紙数の制約上、著書名・論文名を省いたところがある(注2など)。また、用例も一部省略した。機会を得て、改めて詳述したい。